

相模原殺傷きょう半年

命を区別させない

京の障害者ら 3月にシンポ

相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」で19人が殺害され、27人が重軽傷を負った事件から、26日で半年。容疑者の「重度障害者は生きていてもしょうがないから安楽死させた方がいい」との手紙や発言は社会を揺るがした。大きなショックを受けた京都の障害者らはシンポジウム「相模原障害者殺傷事件 どう受け止めよう考えるか」を3月に京都市内で企画するなど、どうすれば命の重さに区別のない社会を築けるのか、問い続けている。(23面に関連記事)

地域で自立生活を送る障害者らでつくる「国際障害者年」連続シンポジウム運営・実行委員会(事務局・京都市南区)のメンバーは、「津久井やまゆり園」で献花したり、追悼集会に参加したりするなど、つながりを探ってきた。

亡くなった人たちは、どういう人だったのか、なぜ犠牲者の氏名が匿名扱いとされ、施設のことを語りにくくされているのか。実行委メンバーの男性(41)は「重度障害者とひとくくりにするのはなく、一人一人の生きざまを支援したい。事件後の地元の思いや取り組みをまず、学びたい」と、シンポを企画した思いを語る。

その中で出会ったのが、やまゆり園元職員で、事件で亡くなった6人の支援に従事していた西角純志さん。シンポは3月18日午前11

「あなたたちを
決して忘れぬ」

相模原の障害者施設殺傷

事件から26日で半年を迎えるのに合わせ、「津久井やまゆり園」の家族会の大月和真会長が25日、代理人の弁護士を通じ「未曾有の惨事で亡くなった方々のご冥福をお祈り申し上げる。あなたたちのことは決して忘れない」とコメントを出した。大月会長はこの半年を振

り返り「生活は大きく変わった。悲しい現実を受け止めるには、まだ時間が必要だ」とした。

現在地での施設建て替え方針に対して障害者団体などから批判が相次いでいることには「施設でしか生活できない知的障害のある人たちが、慣れない生活を余儀なくされている」と指摘。「安全で快適な生活ができる場所は津久井やまゆり園しかない」と理解を求めた。

時から、京都市南区の京都テルサで。西角さんと神奈川の知的障害者の当事者団体が現地の動きを報告するほか、障害者で医師の熊谷晋一郎(東京大准教授)らが、誰も取り残さない社会を目指し話し合う。参加費500円。(岡本晃明)